



来年、入地130周年を迎える琴似屯田兵。北海道内で初めての屯田兵の入地は大変重要な歴史の転換点です。そんな先人たちがこの街の礎をどのように作り、当時どのように暮らしていたのか。現在までさまざまな文献や写真が世に出されています。そんな中、琴似神社内にひっそりと残る一つの石碑から130年前の生活をひもといてみましょう。

この屯田兵は、明治八年の琴似への入地を皮切りに、明治三十二年の士別・南剣淵・北剣淵を最後として北海道内に三十七兵村（発寒兵村を含めると三十八）が置かれました。

琴似の屯田兵

屯田兵とは、広辞苑第五版によると、その②に「北海道の警備と開拓のために設けられた屯田制の兵。一八七五年（明治八）設置、一九〇四年（明治三七）廃止」とあります。つまり、当時、諸外国などの脅威から北海道を守り、ほとんど未開の地であった北海道を開拓するため、屯田兵を置き、開拓を委ねたのです。

琴似の屯田兵は、主に旧仙台藩士や旧会津藩士からなり、明治八年に一九八戸、翌九年に三戸、十一年七戸が補充され、合計二〇八戸が現在の琴似付近に屯田兵村をつくりました。



▲正装した屯田兵（琴似屯田歴史館資料室蔵）

屯田兵の足跡

— 幼少の養育室 —